

ばんけい

教育ほつとにゅーす

かわら版

こ みち
教育の小径

No.209

2026 March

3月号



(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生



今月のことば

はい すい じん
背水の陣

ここからは一步も退くことができないというせっぱ詰まった状態です。失敗すれば再起はできないことを覚悟して、全力を尽くして事にあたることをいいます。

「学級替え」を考える

- 近年、毎年度学級替えを実施する学校が増えてきました。子どもたちや保護者には、学級替えを実施する意味を分かりやすく説明したいものです。
- 学級替えの作業に当たっては、子ども一人一人の得意分野や課題、人間関係などを十分考慮して学級集団を構成します。

「学級替え」は一大事

年度末になると、学級替えが話題になります。学年が1学級(単級)の場合には実施されませんが、2学級以上の学年では、新年度に新しい学級が編制されることがあります。学級替えは、子どもたちや保護者にとって一大事として受けとめられています。学年の教師は子どもの成績や人間関係などいろいろなことに配慮して対処します。

かつては少なくとも2年間は同じ学級が継続されましたが、最近では毎年度学級替えを行っている学校が少なくないようです。ある保護者は次のように話していました。

「わが子がようやく担任の先生に慣れてきました。仲良しの友だちもできました。学級が編制替えになり、担任が変わると、また慣れるまでに時間がかかります。どうして毎年学級替えを行うのでしょうか。」

筆者自身のことで恐縮ですが、1、2年は組み替えがなく、同じ担任でした。3～6年は同じ学級が続きました。担任は3年と4～6年で変わりました。4年間同じメンバーで遊び学びましたから、級友同士のつながりが深く、いままクラス会が続いています。

学級替えを毎年度行うことにはいく

つか理由があります。最も大きいのは人間関係です。子どもと担任のあいだで、また子ども同士の関係がうまくいっていない場合には、両者の関係を改善するために、学級の構成メンバーを変えます。ただ、子どもの数が定数を増減した場合の学級替えは除きます。

「肌が合わない」という言い方があります。お互いに人間ですから、気持ちを通じ合わない場合もでてきます。最大限の努力は行われますが、どうしても改善されないことがあります。このようなときには、学級の構成メンバーを変え、人間関係を再構築します。それが学級替えです。

校長は、子どもたちや保護者に「多くのお友だちと学ぶことはとても大切なことです。また、いろいろな先生から教えることは、人間として成長するために必要なことです。」などと説明しています。

学級担任に求められる心構え

学級替えの作業は、通常年度末の修了式のあとなどに、現在の学年の担任によって行われます。各担任は、一人一人の子どもをより理解していますから、それらの状況や子ども同士の人間関係に配慮しながら所属する学級を決めることができます。

学習やスポーツ面はもとより、リーダー格の子どもや特別な配慮を要する子どもには特に留意し、学級のバランスをとるようにします。なお、年度末や年度始めに転出入の子どもが予想され、学級数の増減が関連する場合には、「2案」を作成しておくこともあります。

年度末に作成した新学級の構成はあくまでも原案ですから、事前に漏れることがないように校長の指示のもとにしっかり管理します。新年度の校長の決裁のもと、子どもたちや保護者に公表することになります。

学級替えに関連することに学級担任の配置があります。これは校長の裁量ですから、校長は学級の子どもの構成状況を見て、担任を決定します。たとえば年度末に校内で、あるいは本人に内示があっても、新年度に校長が最終の決裁を行うまで、口外は禁物です。

学級替えが行われ、担任が発表された直後に、保護者から「学級を変えてもらえないか」とか「担任を変えてほしい」などといった要望がだされる場合があります。この場合、管理職が対応します。意見として丁寧にかがうことは大切ですが、そうした声で学校の方針を変えることは望ましくありません。学校のとった手だての趣旨や教育的な配慮を丁寧に説明します。

今月の記念日

3月4日

ミシンの日

ミシンが発明されて200年を迎えた平成2年(1990年)を記念し、日本縫製機械工業会が制定しました。「ミ(3)シ(4)ン」の語呂合わせです。

授業とは何か

日々の授業は、基本的に学級という環境で、時間割にもとづいて行われる意図的、計画的な営みです。授業は教師が主導して行うものであると捉えると、知識や技能を一方的に伝達・注入する教師中心の講義型の授業になります。一方、子どもが主体的に取り組むものと捉えると、子どもたちが自分の思いや願いにもとづいて意欲的に取り組む活動型の授業になります。

授業において、教師は教える（指導する）立場にあり、子どもたちは学ぶ（学習する）立場にあります。「学習指導」という用語があります。これは子どもたちの学習と教師の指導の両者を合わせていい表したもので「授業」のことです。授業とはいかなる営みかを確かにするには、授業において教師はいかなる役割を果たすべきか、子どもたちはいかに学びを深めていくかを明確にすることでもあります。

教科等の授業は、多くの場合、子どもたちと教師による主として言語活動を媒体にした協働的な営みです。教師だけが行うものでも、子どもたちだけで進めるものでもありません。国語辞典には、授業とは「学校などで組織的に学問や技術を教え授けること」とありますが、これは必ずしも正しい説明ではありません。授業は教師と子どもによる「共同作品」です。ここに学校ならではの学びの特質があります。

授業観をしっかりとつことで、日々の授業における教師の役割が明確になり、子どもたちにより適切に関わることができるようになります。「授業」という用語を日々何げなく使っていますが、指導や学習との違いを明確にしておきたいものです。



3月は「自殺対策強化月間」

令和7年の児童生徒の自殺者数は、532人でした。自殺の原因や動機の約6割が学業不振や入試、進路に関する悩みです。3月はまもなく進学や進級を迎える時期です。進路に迷ったり悩んだりする児童生徒が多くなるといわれています。各学校は保護者や地域住民、関係機関等と連携し、特に長期休業の開始前から長期休業明けにおける児童生徒の自殺防止に向けた取り組みが求められます。

3月は「自殺対策強化月間」に定められています。文部科学省は通知で各学校に対して、長期休業の開始前からアンケート調査や教育相談、一

人一人への面談などを実施し、悩みや困難を抱える児童生徒の早期発見に努めることを求めています。心や体調の変化を早期に発見するために、「1人1台端末を活用した心の健康観察」などによるSOSの早期把握に努め、自殺の未然防止に取り組むことが重要です。

また、通知では、各学校では全教職員が自殺防止に組織的に取り組むことを求めています。特に自殺など重大な危険行為の予兆を捉えたときには、校内に校長をリーダーとする「校内連携型危機対応チーム」を組織します。また、実際に自殺や自殺未遂が発生した場合には、教育委員会や専門家などから構成される「ネットワーク型緊急支援チーム」を立ち上げるとしています。



人と金が付かない新規施策

企業や行政機関などが新しい事業を始めるときには、組織を新たに立ち上げ、必要な数の人を配置します。必要な費用も配分されます。従前の組織を生かす場合には、それまでの事業内容が抜本的に見なおされます。

学校では現在、かつては行われなかった教育活動が行われています。例えば、平成10年版の学習指導要領で創設された総合的な学習の時間です。近年では、ICT教育があり、英語教育があります。こうした新たな教育が従前の教育活動に上乗せされました。

新たな指導分野が創設されたとき、一部に助手の配置はあったものの、基本は担任が指導することになり、

新たな教師を配置することは行われてきませんでした。現任教師の「研修」を頼りにしてきたことは否めません。

学校には情報機器の操作に不慣れた教員もいます。ICT教育を進める際に、各学校に機器を整備する専門家を配置することで、すべての担任が安心して指導ができるようになります。そのためには費用が必要になることはいうまでもありません。

人的な配置の遅れが教師の仕事を多忙にしている要因のひとつではないかと思われます。学校教育の質的な充実のためにはもちろん教師の努力が求められますが、ただそれだけでなく、人的な整備や財政的な援助が必要だと考えます。「教育は人なり」です。

生徒指導や特別支援教育の面では、課題がより顕在化していることもあって、カウンセラーや教育相談員、指導補助員の配置など、人的な整備が少しずつ進んできました。（T）

INFORMATION

ご注文は文溪堂代理店まで！

こんなときどうする！
**学級担任の
危機対応
マニュアル**



◎著者 北 俊夫
◎定価 950円＋税
◎発行 株式会社文溪堂

A5判 96ページ

「教育の小径」のすべてのバックナンバーを文溪堂ホームページからお読みいただけます。

お知り合いの先生にもお勧めください。



ぶんけい 教育の小径 検索

編集後記

いじめなどの問題が発生する要因の一つに、「環境の停滞」があると聞いたことがあります。環境が変わらないために、一度負のスパイラルが発生するとそこから抜け出すことが困難になるとのことでした。毎年の学級替えで、それが予防できればと願ってやみません。大人の社会であっても、柔軟に環境を変えることを恐れないようにしたいものです。（M記）

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2026年3月1日